三次結合複合動詞と二次結合複合動詞とのかかわり

林　　翠　　芳

1．はじめに

前稿では三次結合複合動詞の構成要素について二次結合のそれと比較しながら考察を行ったが，本稿では三次結合複合動詞の語全体について考察したいと思う。三次結合複合動詞は「動詞＋動詞＋動詞」と三つの動詞によって構成され，ここでは仮にそれぞれを前項要素，中項要素，後項要素と呼ぶことにする。形態的な面から見ると，三次結合複合動詞は確かに三つの動詞による結合という形をなしているが，その意味を考えると『複合動詞資料集』でもこれらの動詞を「うち―消し＝合う」「押っ＝取り―囲む」のように＝の記号[①]で前項要素と後項要素を区別している。このように形態的には三つの動詞によって構成されている語でも，意味的には二次結合複合動詞と深くかかわりを持っているのである。本稿では前稿の作業で『複合動詞資料集』より抽出した185件の三次結合複合動詞の内部に存在する二次結合複合動詞との関係について考察を行い，これを通して三次結合複合動詞の特徴をつかみたいと思う。

2．辞書掲載複合動詞と三次結合複合動詞

本稿の考察対象となる185 件の三次結合複合動詞のうち，僅か19語[②]が辞書の見出し語として扱われ，残り166語はすべて文学作品等データに出現した語であり，臨時的なその場限りの語となっている例も少なからずある。また，三次結合複合動詞の内部に存在する「前項＋中項」或いは「中項＋後項」という二次結合複合動詞が辞書における掲載率も三次結合複合動詞と深くかかわりがあるであろう。まず，表１にそれを示す。

2-1　二次結合複合動詞の存在する語

表１：

三次結合総数	項の組合わせ	数	辞書掲載語（ことなり）	%	のべ	%
185	「前＋中」	164	113	68.90	146[③]	89.02
	「中＋後」	71	26[④]	36.61		

2-1-1 「(前項＋中項) ＋後項」の形

表１の統計によると，全体185件の三次結合複合動詞における「前項＋中項」の二次結合複合動詞例があるのは164件，うち辞書の見出し語として掲載された語は，異なりでは113語で全体の68.90%を占め，延べでは146語であり，全体の約９割を占めている。

『複合動詞資料集』に収録された7432件(異なり)の複合動詞は大きくは文学作品等データ(6834)と辞書データ(2761)に分けられる。辞書データでは，G『学研国語大辞典』・S『新明解国語辞典（第三版)』・I『岩波国語辞典（第三版)』・K『国立国語研究所資料集７　動詞・形容詞問題語用例集』の四種類の資料より複合動詞を拾っている。

上記「前項＋中項」で辞書の見出し語として掲載された複合動詞113語のうち，GSI[5]の三種類の辞書がすべて見出し語として扱われた語は92件もあり，全体の81.41%を占めている。Gの複合動詞見出し語数は2567，Sは2059，Iは1415となっている。どの辞書にどのような語を見出し語として立てるかは，複合動詞に限って考えると，当然それぞれに差異が見られ，また，そこには編集者の編集方針もあるはずである。しかし，一般的には辞書の見出し語として立てるか否かは，その語が複合動詞としての熟合度やその語の意味が特殊化されているかどうか，つまり前項要素と後項要素のそれぞれの単純動詞の意味で語全体の意味が読み取れるかどうか，などの条件が考えられるであろう。

辞書に載るか否かについて，石井正彦(1988)では①辞書に載る（載りやすい）複合動詞と載らない（載りにくい）複合動詞との間には性格の違いが見られる。②その違いは意味が特殊なものが辞書に載るという複合語の辞書登録の一般的な傾向におおよそ合致するものである。③実質的な意味をもつ要素どうしの結びつきである複合動詞については，主体の動作が客体の変化を（必然的に）引き起こす関係にあるA1類[6]が辞書に載る場合が多く，前項要素と後項要素がともに主体の動作または変化を表し，A1類のような関係を構成しないA3類及びA4類が辞書に載らない場合が多い，と述べている。また，森田良行(1978)も国語辞典でその語本来の意味をそのまま残している複合動詞は載せない場合が多く，また，動詞の造語成分はその項目において解釈し，それの付いた形を一々見出し語に立てない場合が多い，と指摘している。

このように考えると，三辞書とも見出し語として立てている語は，前項と後項の動詞では，複合動詞全体の意味を読み取ることが難しい語であろう。とすると，三次結合複合動詞においてその前項と中項により構成される二次結合複合動詞の大半は，このような特徴を持っていると推測することができる。つまり，前項と中項の結びつきが強く，意味的には「(前項＋中項) ＋後項」のように前項と中項を一まとまりの語として見るのが妥当なようだ。勿論，中には「前項＋（中項＋後項)」の形も存在する。そして，

この三辞書とも見出し語として立てている92件の二次結合複合動詞は，辞書にだけでなく，文学作品等データにも出現しており，実例が存在する。

以下その具体例を示す。（紙幅の関係でその一部のみを挙げる）

（居＋坐り）＋続ける	（受け＋止め）＋兼ねる	（受け＋取り）＋兼ねる
（打ち＋消し）＋合う	（売り＋付け）＋始める	（追い＋回し）＋出す
（置き＋替え）＋得る	（押し＋付け）＋合う	（落ち＋入り）＋勝つ
（掻き＋集め）＋始める	（書き＋出し）＋始める	（書き＋立て）＋過ぎる
（掻き＋乱し）＋続ける	（掻き＋分け）＋進む	（掛け＋離れ）＋過ぎる
（着＋替え）＋掛ける	（切り＋崩し）＋出す	（切り＋出し）＋兼ねる
（切り＋抜け）＋得る	（繰り＋返し）＋続ける	（し＋立て）＋上がる
（縛り＋付け）＋合う	（締め＋付け）＋合う	（断ち＋切り）＋得る
（立ち＋止まり）＋掛ける	（立ち＋直り）＋掛ける	（付き＋合い）＋出す
（突き＋出し）＋合う	（突き＋戻し）＋兼ねる	（作り＋出し）＋得る
（突っ＋張り）＋抜く	（出＋回り）＋出す	（飛び＋込み）＋得る
（取り＋交わし）＋始める	（成り＋立ち）＋得る	

（　）で括ってある部分の二語の結び付きは確かに強く，すべて辞書に掲載されている複合動詞である。例えば:「（売り＋付け）＋始める」の「売り付ける」は『学研国語大辞典』では，「〔相手にあまり買う気がないのに〕無理に買わせる。押し売りする。」と解釈しており，「骨董品や美術品を出来るだけ高く売り付ける仕事をしたことがあった」の用例を挙げている。「売り付ける」全体で一つの意味を表し，そして，後項「始める」は開始の意味を表し，アスペクト的な役割を果たしている。

また，「（居＋坐り）＋続ける」の場合，同辞典によると「居坐る」は「①〔他人の家・場所などに〕すわっていつまでもいる。動かないでそのままいる。（中略）②同じ地位や位置などに（ひきつづいて）とどまり動かない。もとのままで変わらずにいる。（中略）③〔経〕相場が変動しないでいる。」の意味となっており，字面ではなかなかその意味がとれない。この二例からでも，辞書に掲載される複合動詞の特徴がある程度うかがえる。

2-1-2 「前項＋（中項＋後項）」の形

三次結合複合動詞には，数が僅かであるが，「前項＋（中項＋後項）」の構成となっている語も存在する。つまり，中項と後項の結び付きが強い語である。

押し＋（取り＋囲む）	押し＋（取り＋巻く）	押し＋（放し＋出す⑦）
打ち＋（見＋やる）	取り＋（し＋切る）	結び＋（垂れ＋下がる）

痩せ＋（干＋からびる）　　転がり＋（落ち＋入る）

などはその例である。このうち，「痩せ～」，「転がり～」はそれぞれの語の中において状態を表し，実質的な意味をもつ語の結び付きとなっており，痩せて干からびる，転がって落ち入る，と言い換えることができ，「自動詞＋自動詞」の結び付きとなっている。また「結び垂れ下がる」は結んだ結果垂れ下がる，と理解できようか。そして，「押し～」「打ち～」「取り～」は接頭辞的な役割を果たしている。

2-1-3 （前項＋［中項）＋後項］の形

表１の統計によると，「中項＋後項」に二次結合複合動詞例があるのは71件，うち辞書掲載語は26件，全体の36.61％を占めている。また，26件のうち，三辞書ともに見出し語として立てた語は20件あった。この20件は前項＋（中項＋後項）のような構成に限らず，（前項＋中項）＋後項のような構成も存在し，（前項＋［中項）＋後項］のように，中項要素は引っ張り凧の状態となっている。

打ち―解け＝合う	折り―畳み＝込む	打ち＝見―やる
落ち―入り＝込む	し―立て＝直す	取っ―組み＝合う
張り―付き＝合う	引き―ずり＝上げる	引っ―掻き＝回す
引っ―張り＝上げる	引っ―張り＝込む	引っ―張り＝出す
引っ―張り＝回す	吹き―掛け＝合う	見―付け＝出す

の15例は，「前項＋中項」と「中項＋後項」の二次結合複合動詞がともに辞書の見出し語となっている。しかし，二次結合の前項要素にも後項要素にもなる中項要素は位置によって，複合動詞の内部において，自立動詞の役割を果たしたり，付属動詞の役割を果たしたり，或いは，意味が完全に特殊化したものもある。

例えば，「し―立て＝直す」の「し立てる」は「①〔工夫して〕作り上げる，こしらえる，特に着物を作りあげる。②〔本来はそうでないものを〕手をつくしてそれらしく見せる。③準備する。支度する。用意してさし向ける。④〔仕事などを〕教えこむ。しこむ。教えこんで一人前にする。養成する。」と『学研国語大辞典』では四通りの意味を挙げているが，どれも「し立てる」の両動詞の本来の意味がうかがえず，意味の特殊化した例である。寺村秀夫(1959・1984）ではこのような語を一体化したものと呼んでいる。また，「立て直す」は「①もう一度改めて立てる。②〔計画・考えなどを〕もう一度最初からやり直す。」とあり，「立てる」はほぼ単純動詞の意味をそのまま生かしているが，「直す」は単純動詞の意味を踏まえながらも，補助動詞として「さらに……する」「改めて……する」「正しく……する」の意味とされている。

また，「打ち＝見―やる」の例の場合，学研によると「打ち見る」の（「打ち」は接頭

語)「ちらっと見る，ちょっと見る。」の意味で，「見やる」は「①〔特に視線を定めずに〕遠くの方を見る。②ある特定の方向に目を向ける。視線を投げる。」の意味である。「見る」は両複合動詞において単純動詞の意味が生きているが，「打ち見る」「見やる」は実質的な動詞と動詞の結び付きではない。

このように，三次結合複合動詞の中項要素は，二次結合では前項要素にも後項要素にもなり得る語があり，しかし，語の内部においてはその語の果たしている意味が違っている。そして，三次結合複合動詞においては「(前項＋中項)＋後項」か「前項＋(中項＋後項)」のどちらかの意味的構成となっている。

2-2　二次結合複合動詞の存在しない語

三次結合複合動詞では「前項＋中項」或いは「中項＋後項」に二次結合の複合動詞があるものが殆どであるが，中には，どちらの方にも二次結合の該当例がないものも185件中，14例あった。

祈り―歌い＝明かす	打ち―明け＝合う	打ち―明け＝兼ねる
落ち―着き＝掛ける	落ち―着き＝出す	落ち―着き＝払う
落ち―着き＝澄ます	駆け―ずり＝回る	反り―くり＝返る
立ち―登り＝始める	煮え―くり＝返る	引っ―くり＝返す
引っ―くり＝返る	ほどけ―掛け＝出す	

がその例である。このうち，「打ち―明け＝合う」「打ち―明け＝兼ねる」の「明ける」は『複合動詞資料集』では，二次結合の場合「空ける」の字で表記しており，「落ち―着き＝掛ける」「落ち―着き＝出す」「落ち―着き＝払う」「落ち―着き＝澄ます」の「着く」は，同資料集では，二次結合の場合「付く」を使っている。また，「立ち―登り＝始める」の「登る」は，二次結合では「上る」の漢字を当てている。とすると，この6例はやはり「(前項＋中項)＋後項」の意味関係となっており，「打ち明ける」「落ち着く」「立ち登る」はそれぞれ一まとまりのものとして考えられる。そして，これらの語の中には「中項＋後項」の形，「着き(付き)＝掛ける」「着き(付き)＝出す」「登り(上り)＝始める」の二次結合例が見られた。また，「祈り―歌い＝明かす」「ほどけ―掛け＝出す」は文学作品等データに出現した語で，おそらく，前後の文脈で意味がとれ，臨時的なその場限りの結合関係をなしている語と言えよう。「反り―くり＝返る」は「引っ―くり＝返る」の語の形に大変近い。

残りの「駆け―ずり＝回る」「煮え―くり＝返る」「引っ―くり＝返す」「引っ―くり＝返る」と「落ち―着き＝払う」は三次結合のままの形で辞書に掲載され，「前項・中項・後項」全体で一つの単位になっている場合が多い。また，上記の語のほか，「取っ

—組み＝合う」「取り＝し—切る」「這い—ずり＝回る」「引き—ずり＝落とす」「引き—ずり＝込む」「引き—ずり＝出す」「引き—ずり＝回す」「引っ—掻き＝回す」「引っ—張り＝出す」「引っ—張り＝回す」「踏ん—反り＝返る」「見—付け＝出す」の12例も三次結合の形で辞書が見出し語として立てている複合動詞である。そして，この12例は二次結合の形も見られる。基本的には三次結合複合動詞は，やはり「(前項＋中項）＋後項」或いは「前項＋（中項＋後項)」のどちらかの意味的構成となっていると考えてよいであろう。また，二次結合複合動詞と同様，三次結合複合動詞についても，三辞書の中で中型の『学研国語大辞典』の掲載率が最も高かったようだ。

3．二次結合と三次結合の後項要素の特徴

『複合動詞資料集』によると，後項要素で上位度数を占めるものは，得る(432)出す(432)　始める(399)　合う(273)　掛ける(236)　込む(231)　切る(207)　過ぎる(173)　続ける(169)　付ける(143)　上げる(129)　兼ねる(110)　掛かる(90)　尽くす(76)　付く(75)　返す(73)　直す(72)　立てる(72)　上がる(71)　取る(70)　合わせる(69)　去る(68)　終わる(62)　入る(58)　立つ(57)　替える(51)　抜く(50)　通す(49)　返る(47)　入れる(46)　落とす(46)　回る(45)　回す(43)……おる(33)　となっている。

一方，三次結合の方は後項要素の上位を占めているのは，得る(27)　出す(25)　始める(23)　合う(16)　掛ける(16)　兼ねる(12)　続ける(７)　過ぎる(６)　返る(５)　込む(４)　回す(４)　切る(３)　返す(３)　おる(３)となっている。

二次結合複合動詞で後項要素としてよく用いられている語は，三次結合複合動詞の後項要素としても比較的よく用いられている。上に挙げた14語で延べ使用回数154となり，185件の三次結合複合動詞の後項要素の８割（83%）もカバーしている。同じ14語を二次結合で見ると，それの延べ使用回数は2748となり，7432という全体数に対して36.97%をカバーしている。勿論，185と7432とはその数のひらきが大き過ぎるため，比較するには無理が感じられる。しかし，そこから三次結合複合動詞の後項要素と二次結合複合動詞の後項要素の傾向がある程度うかがえる。つまり，三次結合の後項にはよりアスペクト的，より補助動詞的な要素が集中しているのである。

２では辞書掲載語（二次結合）と三次結合複合動詞との関係について見た時に，三次結合複合動詞は「(前項＋中項）＋後項」あるいは「前項＋（中項＋後項)」の意味関係になっていることが分かり，そして「(前項＋中項）＋後項」の構成となっている語が多く，(前項＋中項）によって構成される二次結合複合動詞の辞書掲載率も高かったことが分かった。この二次結合複合動詞の後項要素と三次結合複合動詞の後項要素とは果

たして違いがあるのだろうか。

三次結合複合動詞の（前項＋中項）に二次結合複合動詞があるのは，表１の統計によると164である。そしてこの二次結合の後項要素として上位に並ぶものは，出す(15)　付ける(10)　ずる(９)　張る(８)　詰める(７)　付く(６)　くる(５)　などである。このうち「出す」を除くと，あとの６語は三次結合複合動詞の後項要素としては用いられていない。

「～出し～」を例にとると，「言い出し＝掛ける・兼ねる・そびれる」「売り出し＝掛ける」「書き出し＝始める」「作り出し＝得る」「乗り出し＝過ぎる」「引き出し＝得る」「拾い出し＝得る」「突き出し＝得る」「切り出し＝得る」「見出し＝得る・掛ける・兼ねる・始める」の結合例がある。「言い出す」「見出す」は，言い始める，見始めるの意味以外，先に言う，見いだすの意味もあり，ここでは後者の意味が生きていると思われる。また，上記の語では「拾い出す」を除くと，全部辞書の見出し語として扱われている。このように，三次結合の中項にはアスペクトを表す語が位置しにくいことが分かる。これが三次結合の後項と二次結合の後項と大きく違うところである。そして，前稿で見てきたように，可能・不可能を表す語，過不足を表す語も中項には位置しにくい。

４．三次結合複合動詞の自他性

一般的には，二次結合複合動詞の前項と後項の自他性は一致している。つまり，「自動詞＋自動詞」「他動詞＋他動詞」のようになる。三次結合複合動詞の場合，果たして二次結合と同じような自他の構成となっているのだろうか。185件の三次結合複合動詞の殆どは前述のように，「前項＋中項」の結び付きが強く，後項要素は付属的な役割を果たしている場合が多い。ここでは，「前項＋中項」を一まとまりの語として見た場合，その自他性と後項動詞の自他性の結合関係を見ていきたい。

例えば，「～得る」は自動詞で「……できる」の意味を表す。「得る」と接続できる「前項＋中項」の二次結合複合動詞に，自動詞には「生き残り～」「飛び込み～」「成り立ち～」「結び付き～」，他動詞には「言い表し～」「打ち消し～」「取り戻し～」「引き出し～」「見極め～」「結び付き～」などの例があり，他動詞と「得る」との結合例が多いが，自動詞とも接続できる。

「～出す」は他動詞で「……始める」「……して外へ現す」の意味であるが，自動詞との結合例「打ち合い～」「付き合い～」「出回り～」「取り掛かり～」，他動詞との結合例「追い回し～」「切り崩し～」「引っ張り～」「引きずり～」などの例があり，「得る」と同様他動詞との結合例が多い。

始める（他動詞） 合う（自動詞） 掛ける（他動詞） 兼ねる（他動詞） 続ける（他動詞） 過ぎる（自動詞） 込む（自動詞）などの語と結合した前項要素「前項＋中項」について調べた結果，上記の語はすべて自動詞とも他動詞とも結合している例が存在していた。勿論，語によって自他との結合の偏りが見られ，「兼ねる」の場合は殆ど他動詞との結合例である。二次結合複合動詞の場合も後項要素が補助動詞的な意味を表す時，ことにアスペクトを表す時は前項の求める格で決まるので，前章で見てきたように三次結合複合動詞の後項は８割以上がアスペクトや補助動詞的な役割を果たしている語であるため，語全体の自他性はほぼ前項動詞「前項＋中項」の自他性によって決まると言えよう。

以下幾つかの具体例で見ることにする。

◦太郎と花子が付き合い出した。（【自】・他）（作例）

◦互いに顔を見詰め合う。（【他】・自）（作例）

◦彼女への好意の気持ちが消え去り始めた。（【自】・他）（作例）

◦彼のおかげで私が生き残り得た。（【自】・他）（作例）

◦大方待ち草臥れ掛けた時，伸子は……佃の姿を認めた。（【自】・他）

（『学研国語大辞典』）

上の例で分かるように，どれも前項動詞「前項＋中項」の自他性によって格が決まっている。時間相を表す「始める」「出す」「掛ける」[8]「続ける」は前項二次結合複合動詞の事態や動作などの開始・継続を表し，「得る」「兼ねる」はその動作などをすることが可能・不可能や難易を表す。これらは前項要素との結び付きがあまり強くなく，様々な前項要素と結合することができる。三次結合複合動詞の後項において補助動詞化した語は，殆どこのような特徴を持っている。

一方，実質的な意味を持っている幾つかの後項要素について見ると，「（引き＋ずり）＋行く」（他・自），「（掻き＋分け）＋進む」（他・自），「（引っ＋張り）＋寄せる」（他・他自），「（引き＋ずり）＋下ろす」（他・他）などの例でも前項と後項の自他の結合も比較的自由なようだ。意味は「～して～する」のようになる。

このように三次結合複合動詞で「（前項＋中項）＋後項」の意味関係を持っている複合動詞については，「前項＋中項」の自他性によって語全体の自他性が決まり，後項要素はさほど強い影響力を持っていないのである。

5．終わりに

以上三次結合複合動詞についてその内部に存在する二次結合複合動詞との関係やその

二次結合複合動詞の辞書掲載率や三次結合複合動詞の自他性について見てきたが，三次結合の内部に存在する二次結合複合動詞が三次結合の語全体の意味や格を決める実権を握っており，また，語の構成も「(前項＋中項）＋後項」か「前項＋（中項＋後項)」の結合関係となっていることが分かった。このように三次結合複合動詞が二次結合複合動詞と深くかかわっていることが分かる。古典語にも三次結合複合動詞が存在するが，果たしてどのような結合関係となっているのか興味をそそられるところである。

注

① 本稿では『複合動詞資料集』の区切り方に従う。

② 前稿の統計17に対して訂正する。

③ 前項の統計136に対して訂正する。

④ 異なりと延べの数は同じ26である。

⑤ ここではKを外すこととする。

⑥ 石井氏は構成要素間の関係をA，B，C，Dの四類に分け，そのうち，A類についての細分類をしている。A1類：前項が主体の他動的な実現形態を表し，後項がそれによってひきおこされる客体の変化の内容を表す。A2類：前項が主体の自動的な実現形態を表し後項がそれによって生ずる主体自らの変化の内容を表す。A3類：前項も後項もともに主体の動作または変化を表し，前項が後項を修飾する関係にある。A4類：前項も後項もともに主体の動作または変化を表し，両項が対等の関係にある。A5類：前項が主体の状態を表し後項がそのもとでの主体の動作または変化を表す。

⑦ 「押っ＝放し＋出す」には「押っ＝放す」があるが，「放し＝出す」の二次結合例はない。

⑧ 「掛ける」は補助動詞として開始の意味を表す以外，別の意味もある。

参考文献

① 野村雅昭・石井正彦・林　翠芳『複合動詞資料集』(特定研究「言語データの収集と処理の研究」1987)

② 石井正彦「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」(『日本語学』5,1988)

③ 森田良行「日本語研究の問題点――日本語複合動詞について――」(早大語学教育研究所『講座日本語教育』14，1978)

④ 「現代語における複合動詞の自・他の形式について」(『静岡女子大学国文研究』17，1984)

⑤ 石井正彦「複合動詞」(『ケーススタディ日本語文法』桜楓社　1987)

⑥ 山本清隆「複合動詞の格支配」(『都大論究』21,1984,3)

⑦ 寺村秀夫「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト(1)」(『日本語・日本文化』1，1969)